

【月刊】キリスト教書評誌

本のひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2020年5月1日発行（毎月一回発行）第749号

May
2020 5

● 出会い・本・人

宝探し 田中健三

● 特集「預言者」を学び直すなら

この三冊！ 金井美彦

● 本・批評と紹介

石丸昌彦 監修 精神障害とキリスト者 申 英子

ウイリアム・キャヴァノー 著／東方敬信、田上雅徳 訳

政治神学の想像力 加藤喜之

金子晴勇 著 アウグスティヌス『神の国』を読む 和田光司

濱 和弘 著 人生のすべての物語を新しく 藤本 満

基督教共助会 編 森明著作集「第二版」 金子晴勇

大井 満 責任編集 聖なるたたずまい 大嶋重徳

ジュセッペ・三木一 著／佐藤弥生 訳／松島雄一 監修

アベルのところで命を祝う 川上直哉

原 野百合 著 ベツレヘムの星 中村和雄

近刊情報

書店案内

近刊予告

5月末刊行予定

最新の研究成果や新事実を反映した約5150人のキリスト教関係者を網羅。日本キリスト教史研究の里程標ともいえるべき必須の基礎文献。

日本キリスト教歴史人名事典

鈴木範久 監修
日本キリスト教歴史大事典編集委員会 編

● B5判・函入・1016頁・本体45,000円 (特別価格 本体42,000円)・2020年8月31日まで

好評既刊



死海写本の謎を解く

E・M・クック 著 土岐健治 監訳 太田修二／湯川郁子 訳
20世紀最大の考古学上の発見と言われる「死海写本」。しかし、その発見と研究のストーリーには常に謎と疑惑がつきまとい、様々な臆説や誹謗中傷が後を絶たない。数々のミステリーが生まれる背景を明らかにする入門書。

● 四六判 348頁・本体3,500円



イエス時代の古代ユダヤの一次文献として「20世紀最大の考古学的発見」と言われながらも、その発見・研究・公刊を巡り様々な疑惑やスキャンダルが飛び交ってきた死海文書その価値はどこにあり、古代ユダヤ教と初期キリスト教研究にどのような影響を及ぼしたのか? 熾烈を極めた議論の争点をコンパクトにまとめた最良の入門書。

● 四六判・256頁・本体2,400円

『死海文書』物語

どのように発見され、読まれてきたか

J・J・コリンズ 著
山吉智久 訳

好評既刊

なぜ世界に悪や苦しみがあるのか



神は悪の問題に答えられるか

この世界で経験される不条理な悪は、神の全能や善性と両立するのか。現代英米を代表する神学者・宗教哲学者が神義論をめぐる、白熱した議論を闘わせる。

● 四六判 440頁・本体3,500円

神義論をめぐる五つの答え
ステイヴン・T・デイヴィス 編
本多峰子 訳

悪と神の正義



悪と不条理がはびこるこの世界で、神は何をしておられるのか?
N・T・ライト 著
本多峰子 訳

● 四六判 216頁・本体2,000円

十字架による神の最終的勝利と神の王国を見据え、今ここに生きるキリスト者を新しい使命へと導く画期的な書。現代を代表する新約聖書学者による、新しい神義論の試み。





宝探し

田中健三

中学・高校時代は日本近現代文学に魅了されていました。大人の世界についての視野が拓けていったと同時に、人間というものに対していつの間にか悲観的になっていったのは思春期特有ということだけでなく、小説の影響もあったように思います。太宰治や芥川龍之介のように、自分の人生も短いかなと漠然と考えたりしていました。

大学に入ると、このように内省的なままでよいのだろうか、と自分の羅針盤が働き、小説を読むのをやめました。そのような時に偶々出会ったのは、カール・ヒルティ『幸福論』という本でした。期待せずに読んでみたところ、難しい内容ながらも人生に対する前向きな姿勢が自分の琴線に触れ、それをきっかけにキリスト教についてもっと知りたいと思うようになり、矢内原忠雄『キリスト教入門』を手始めに、キリスト教関連の著作を読み進めていきました。

しかし「キリスト教とは何か」という問いを本だけで探

ることに行き詰り、当時講義を受けていた法学部のある教授がクリスチャンだという噂を聞き、その教授に手紙を書き、個人的に会ってもらうに至りました。実際に会ってお話させていただいたのですが、どうもしっくりきませんでした。

大学を卒業し、社会人になって働き始めながらも、自分のもやもやした不安に満ちた思いはなくなり、そんなある日書店で見つけた本の著者が、矢内原忠雄の弟子である高橋三郎というキリスト教伝道者でした。そしてその後、高橋先生にやはり個人的にお会いすることができ、この出会いこそはその後の私の人生を決定づけたのです。

「宝探し」のように見つかるまで紆余曲折がありました。

(たなか・けんぞう 上智大学神学部講師)



「預言者」を学び直すなら ▼この三冊！

金井美彦

(かない・よしひこ…日本基督教団砩教会牧師)

この時代、「預言者」について何を語ることができるか。

神の言葉を預かる者という簡単な定義では、例えば「幸福の科学」総裁、大川隆法、古くは統一教会の創立者、文鮮明のような、新興宗教の教祖も「預言者」である(時にメシアでさえある)。彼らの主張を詳しく知るわけではないが、彼らを信奉する人々は、彼らの言葉を指針として生きているはずである。宗教的主張を自由に表現できる世界では、「預言者」は限りなく出現する。

世界になり、人間自体が一部の人間の家畜と化し、世界は定常化する。こうして世界が終わっていくなら、もはや「預言者」の立ち入る余地がない。そして現実にならぬとすると私は感じている。それゆえ、この時代、「預言者」について語るべきことはほとんどない気もする。

しかし、私はこの定常化していく世界は、ありうる世界であるが、あるべき世界ではないと思う。村田沙也加の小説『コンビニ人間』の主人公はコンビニというシステムの一部に過剰に同化することによって自己の意味を獲得するが、これはアイロニーであると解釈したい。ありうる世界ではあるが、やはりあるべき世界ではない。その世界への同化は自発的隷従(エチエンヌ・ド・ラ・ボエシ)に過ぎず、結局自己の意味の獲得の失敗ではあるまいか。ところで、先に名をあげた六人のカ

してみると、預言者たちの活動の価値は相対的であり、各宗教団体内部においてのみ、その真実性と有効性が認められれば十分である。それ以上何を、預言者に求める必要があるか。

しかし、無数に現れたはずの彼らの「価値」は必ずしも相対的、一時的、部分的であるとは限らない。預言者たちの言葉は歴史の審判を受け、それに耐えたものだけが残ってきた。したがって、信用に足る預言者はそれほど多くはないが、その中の幾人かは、そ

リスマは偉大な預言者であるが、彼らは創唱者であった。それゆえ、理想化と神格化が過ぎて、彼らの葛藤はややおぼろげである。一方、あるべき世界とありうる世界(今ある世界も含む)をきわめて敏感に分別し、あるべき世界を敢然と訴え続けた人間たちの記録が旧約聖書には数多く残された。それが預言書である。この文書群は創唱者であるモーセについての書(「モーセ五書」、ただし「ついて」というと語弊があるが)とはちがって、大部分は預言者自身の「生なま」の言葉であり、彼らが生きた現実とその延長としての「ありうる世界」と、彼らが幻に見た「あるべき世界」との対照が極めて鮮やかに残されている。

しかし、これらの預言書を読むことが、すでに預言者を無用とする現代にあって意味があるのが問題となる。私は端的に「ある」と言いたい。とい

の言動によって人間世界の新たな秩序を形成した。例えば、モーセ、イエス、ブツダ、孔子、ゾロアスター、ムハンマドなどの偉大なカリスマの力は、人間の生全体(彼ら以降の歴史)を支配するほどの射程を持ちえたのである。では、その「キモ」は何か。それはおそらく、「良き未来へと人々を繋ぐ」ことであった。

しかし、現代では上記の偉大な預言者たちの遺産は風化しつつある。なぜなら、彼らが根拠とした神や天、無ないし空といった、目の前の現実とは次元の異なるリアリティは、もはや力を失っているからである。彼らが見出した、あるいは構想した「別の」世界は人々の関心を引かない。言い換えれば、もはや「良き未来」への渴望が失われ、今ある世界のカイゼンだけが目指されることになる。やがて世界は人間とその家畜と栽培植物だけの極めて単調な

うのは、彼らこそ、古代オリエント文明の転換期、というより、その文明が終わりゆく時代、言い換えれば、あるべき世界ではなく、ありうる世界に閉じていた時代の中で、ほとんど唯一、「あるべき世界」を見出していたからである。それゆえ、私は現代のような「ありうる世界」だけがドラドラと望まれている時代にこそ、彼らを参照することに意味があると思う。

さて、前置きが長すぎたが、旧約聖書の預言者とその文書群を学ぶために有益な書物をいくつか紹介したい。一つは簡便なもので、木田献一『古代イスラエルの預言者たち』(清水書院、一九九九年、新装版二〇一六年)である。この書の特長として、序章で預言者を理解するための前提として旧約聖書の本質について短く触れている点あげられる。木田は旧約聖書の本質は預言者的であるとす立場で一貫して

いるが、その「預言者的」というのは、要するに隷属からの解放と自由な主体の形成、そして相互主体的な共同体の形成を促すことである。この観点から旧約の各預言書を簡潔、かつ端的に解説している。

次に、私自身頻繁に参照するのが、J・ブレンキンソップ『旧約聖書の歴史』（教文館、一九九七年）。これは預言書の概説としてはかなり詳しいもので、しかも内容的にバランスが良い。ただし、二〇年以上前の作品なので、限界はある。

前後するが日本では一九九〇年代に、クラウス・コッホの『預言者』（教文館、一九九〇年）が訳された。これは現代的（とはいえ原著は一九七八年）な関心から預言者を捉えなおしたものの（ただし、『預言者Ⅱ』の邦訳は二〇一〇年刊）。つまり、この時代に預言者を学ぶことに意味があるかという

危機意識である。

以上三冊のほかに、より深い学びのために、樋口進『古代イスラエル預言者の特質——伝承史的・社会的的研究』（新教出版社、二〇一三年）を挙げたい。論文集であるが、預言書についての正統な伝承史的研究を前提に、前八世紀から六世紀にかけての預言者の活動を古代イスラエルの歴史と社会に照らして解釈し、彼らの活動の特質を明らかにしている。

若い頃に私も編集にほんの僅かに関わった金井・月本・山我編『古代イスラエルの預言者の思想的世界』（新教出版社、一九九七年）は当時の中堅若手が集まって、古代オリエントの預言、旧約から新約までの預言と預言者について専門的見地からの論考を集めたもので、幅広く預言について学ぶことができる。ただしこれも前世紀のもの。最近では、これも専門的であるが田

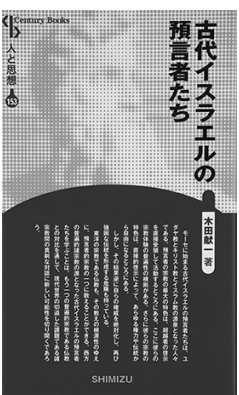
古代オリエントの文脈から説き起こしながら、イスラエル預言者の独自性を明らかにし、その展開をたどり、死海文書の預言と新約の預言者にまで言及する。加えて、簡単な各預言書研究の手引きまでつく。

最後に、コッホは前世紀の末の危機意識を基に預言者論を書いたが（彼の言う「メタヒストリエ」とはその意識の投影かも）、彼の危機意識はナイーブだったようだ。二〇二〇年の私たちは彼の状況より、はるかに深刻な地点

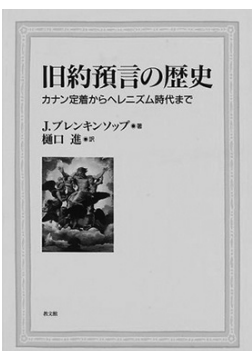
島卓『エレミヤ書における罪責・復讐・赦免』（日本キリスト教団出版局、二〇一八年）が興味深い。やや牽強付会な感もあるが、J・デリダの問題意識とそれに対する批判的な視点から、つまり人道的な罪（特に二〇世紀の巨大な戦争と殺戮）に対する罪責とそれに応答する赦しの関係に見るキリスト教的前提に対し、本来それは旧約聖書において表現されたユダヤ的思考にさかのぼって了解すべきであるという視点から、その焦点となるテキストとしてエレミヤ書を取り上げる。近年のエレミヤ研究の成果を踏まえつつ、哲学的・神学的な観点から、エレミヤ書の思想的な可能性を明らかにする刺激的な研究である。

欧文のを一冊。比較的最近の入門書だが、Reinhard G. Kratz, *The Prophets of Israel, Critical Studies in the Hebrew Bible 2*, Eisenbrauns, 2015は

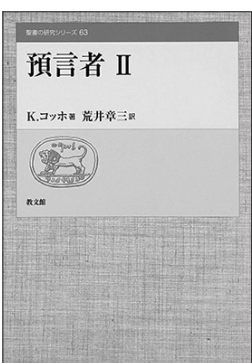
にきているからだ。それでもなお、私は先達の研究を紐解きつつ、聖書の可能性、というより、ヤハウエの言葉と幻に接した先駆者たちの息吹に触れ、自らの生きるこの世界とは別の、「あるべき世界」を構想し、形にしたいと思う。



『古代イスラエルの預言者たち』
木田献一：著
清水書院
1999年刊（新装版2016年）
新書判256頁
1200円（税別）



『旧約聖書の歴史』
カナン定着からヘレニズム時代まで
J.ブレンキンソップ：著
樋口 進：訳
教文館
1997年刊
A5判389頁
5700円（税別）



『預言者』Ⅰ、Ⅱ
クラウス・コッホ：著
荒井章三、木幡藤子：訳
教文館
Ⅰ1990年、Ⅱ2009年刊
B6判、Ⅰ340頁、Ⅱ384頁
Ⅰ2427円、Ⅱ2700円（税別）

すべての教会で読まれるべき書

〈評者〉 申 英子



精神障害とキリスト者
そこに働く神の愛
石丸昌彦監修

読み終えて、これは全国の教会で必ず読まれるべき本であると思いました。障がいの中でも精神障がい（私は「害」という字を使うことには抵抗があります。このことばの基になっっている英語の *disorder* は「疾患」とも訳せるので「精神疾患」と表記を改めてはどうかと思います）は教会においても世間と同じく、厳しい偏見と差別の対象になっています。自分は決して精神障がいの人を差別していません。思っている、この本を読むことにより自分が最も小さな者に現れる神性（マタイ二五・四一以下参照）に向き合っていないことを知らされます。

読みながら、何度涙が出たか分かりません。教会その他で出会う精神障がいの方たちのことを思います。そしてこの本に紹介されている人たちがその障がいに苦しみ、にもかかわらず「生かされている」ことが手に取るように紹介

されているからです。あちこちに引用されているみ言葉は絶妙に、さまざまな場面でピッタリと居場所を得ているのも素敵です。

また監修を担われた石丸昌彦医師の、専門家としての豊富な知識や経験、信仰と愛に基づいた大きな包容力のある応答は、読み終えると、まるでホップ、ステップ、ジャンプのような気持ちになって「わたしたちもやれるじゃないか」と背中を押され、希望の光へと導かれます。

この本はキリスト教月刊誌『信徒の友』で二〇一七年度から一八年度にかけて連載された《シリーズ精神障害 そこに働く神の愛をめぐって》を基として書籍化されました。よくぞと感謝です。

本書で取り上げられた精神障がいは統合失調症、双極性障がい、アルコール依存症、薬物依存症など多岐にわたり

ます。全ての項目を紹介するには、残念ながら字数が足りません。いくつかを選んで短く紹介します。

最初に置かれているのは「教会は居場所になるか」です。精神障がい者に限らず、一人暮らし世帯が増えているこの時代に居場所になる覚悟が教会にあるのか、という問題にも気づかされます。

「躁うつを抱えて牧会するということ」（七九頁以下）は病を抱え牧会する牧師の体験です。石丸医師は「十字架の力を見失わないように」と言われ、どうして精神疾患は起きるのかをここでわかりやすく解説しておられます。多忙な方はまずここから読むのもよいでしょう。

書籍化に当たって新たに書かれた最後の項目（一九九頁以下）は、ある教会において発達障がい、性同一性障がい、

その他の精神障がいに苦しむ人たちがどのように居場所を与えられているかを知ることができます。

私の心を特に打ったことがあります。

「障害者にはできないことは多い。でも教会でやさしく受け入れてもらえるとき、生きていていいのだと思える」（九九頁）

これこそ福音です。

ぜひ、教会全体で読んでいただければと願います。せめて役員会で読めるなら、その教会に新たな活力が与えられることでしょう。

（しん・よんじや）日本基督教団西九条ハニル教会牧師（四六判・二二六頁・本体二〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

従来ない斬新なコヘレト書解釈



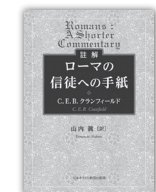
VTJ旧約聖書注解 コヘレト書

小友聡

東京神学大学教授
日本基督教団中村町教会牧師

「コヘレト書は黙示思想へのアンチテーゼである」との立場から同書を読み解き、「ほんの束の間である生を生き抜け」という使信を明らかにする。A5判・210頁・3520円

世界最高峰のローマ書註解



註解ローマの信徒への手紙

C・E・B・克蘭フィールド 山内眞訳

定評ある英国の註解シリーズ ICC『ローマ書』の簡易改訂版、待望の邦訳。最難関にして重要なパウロ神学の到達点を学ぶ全ての信徒・教職必携の名著。A5判・546頁・11000円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp 《価格10%税込》
<http://bp-ucci.jp>

聖餐の政治的ポテンシャル

〈評者〉
加藤喜之



政治神学の想像力

政治的实践としての典礼のために

ウィリアム・キャヴァノー著

東方敬信、田上雅徳訳

突然襲いかかってきた感染症は瞬く間に広まった。ヒト、モノ、カネの動きがこれだけ無制約になっている今、当然の結果だろう。同時に逆説的ではあるが、普段目に見えないはずの「国境」が意識にのぼる。閑散とした空港やビザの停止といったイメージによってである。

国境によって規定される「国家」も目に見えない。その存在を確固たるものとしているのは、空間と時間を一定の仕方て規定する想像力だと著者はいう。本書の狙いはその想像力の働きを明らかにし、抑圧的になりつつある近代国家とグローバル経済からの解放を可能にする共同体の姿を描き出すことにある。

近代以前の社会において、権力は君主が独占していたのではなく、教会や貴族やギルドなどによって共有されていた。近代国家はこうした組織を解体し、人類をバラバラな

個人として再定義し、独占的に契約を結ぶ。このプロセスには紆余曲折あったが、とくに教会との争いは熾烈を極めた。国家と教会はともに同じ問題を扱っていたからである。競い合う個人のあいだに平和を構築するというものだ。

国家の側から言わせてみれば、教会こそが平和の破壊者だった。宗教改革によって分裂した教会が生んだ宗派間の争いは、戦争にまで発展したからだという。だが著者によるとこれは神話に過ぎず、この時代に起きた戦争の主な原因は、むしろ権力を独占しようとする国王とそれを制約しようとする貴族たちの争いであった。もちろんそこに教会が絡んでいたのは否めないが、その理由もまた権力を独占し、教会を支配下に置かんとする国家に抗うためであった。だが結果的にこの争いに敗れた教会は、「宗教」として再定義されていく。宗教とは近代的な概念であり、その目

的は国家に奉仕するよき国民の育成にあった。国家に支配されつつあったプロテスタント教会がこの役を演じるのは難しくない。問題はローマ教会である。国境を超える普遍性と位階による統治は、当然のことながら近代国家との軋轢を生む。ホッブズ、ロック、ルソーがそろってローマ教会を敵視したのも肯げよう。

このようにして国家は教会を排除していったが、約束した平和を与えられない。国家の内部において他者との関係は暴力に保証された法的なものに還元され、対外的には常に戦争の可能性があるからだ。また、グローバル化も、普遍的なものの下に地方的なものを組み込もうとする近代国家の試みの極大化にすぎず、平和をもたらすことはない。むしろ平和は教会という聖餐の共同体によって成し遂げ

られると著者はいう。聖餐とは神からの純粹な贈与であり、近代国家が依拠する契約や交換とは異なる。贈与されるのはキリストの体であり、それを所有することはできない。与える側は贈与される者のなかに存在しつづけ、贈与される者はまた贈与されるキリストの体に変えられていく。このような聖餐によって生み出された共同体には中心と地域の差別はない。中心はどの地域においても見出されるが、それによって普遍性が妥協されるわけでもない。こうして捉えなおされた空間は、国家や市場による主体の領土化に抗うことができる。とはいえ、国家と市場の論理に感染した現代の教会にとり、本書が治療薬となりうるには、その病の恐ろしさに気づくことから始められなければならない。

(四六判・二〇〇頁・本体二五〇〇円＋税・新教出版社)

(かとう・よしゆき 立教大学文学部准教授)



死生学年報 2020

死生学の未来

東洋英和女学院大学
死生学研究所編
●A5判並製 本体2500円＋税

古代の死生学から未来へ
『ギルガメシュ叙事詩』を
読みなおし続ける
渡辺和子

●
現代世界における
「宗教」のヴィジョン
鶴岡賀雄

●
哲学的主題としての
死後生の問題
深澤英隆

●
心の病に寄り添うということ
福田 周

●
ひきこもり状態にある人々の実態
渡部麻美

●
この人生をどう終えるか
人生の終末期における意思決定と
死生観について
奥野滋子

●
「小さな死」と「救し」
大林雅之

●
復讐は生きがいとなるのか
根岸紗那

●
他、7篇

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
TEL03-3238-7678 FAX03-3238-7638

西洋の国家観・歴史哲学形成を 知るために不可欠の書！

〈評者〉 和田光司



アウグステイヌス『神の国』を読む
その構想と神学
金子晴勇著

アウグステイヌスの『神の国』は西洋文明を代表する名著の一つである。この書はキリスト教世界としての中世ヨーロッパ文明の形成において、ことに政治思想や社会思想の面で決定的な影響を与えた。また、歴史についての考え方（歴史観）や物語としての歴史の語り方（歴史叙述）の歴史、すなわち「史学史」の分野においても突出した存在であり、古代ギリシャ・ローマでは一般的であった「歴史は繰り返す」という「循環的歴史観」を否定し、「歴史には始まりと終わりがある」という「直線的歴史観」を本格的に基礎付けた。この歴史観は変化を受けつつもヨーロッパ文明の中で主流であり続け、十九世紀には今の我々の歴史学である「近代歴史学」を生むことになる。この歴史観は終末論との関係でキリスト教界で言及されることも多く、信徒にとっても身近な存在であり、また政治思想と

してもニーバーへの影響に見られるように、今日なおキリスト者に示唆を与え続けており、そもそもこの書自体が信徒が読めば素直に信仰を励まされる偉大な信仰書であり続けている。

このように、キリスト教界のみならず人類にとって大変重要な書物なのであるが、これを読み通すのは並大抵のことではない。まず、あのアウグステイヌスが十四年をかけただけあってその量が膨大であり、岩波文庫版で全五冊、教文館の『アウグステイヌス著作集』でも全五巻もある。その内容も、とくに我が国の一般読者には比較的なじみの薄い古代オリエントやギリシャ・ローマの歴史や、古代の異教哲学者への反論の部分が多く、基礎知識がなければ容易ではない。

大森林に彷徨い込んだ印象がある。適切な地図とコンパスがなければこれを踏破するのは極めて困難だが、それらに当たる読書の手引きとしては、たとえば各翻訳には訳者による概説が記されており、有益とはいえないものの、この大著に対して簡略すぎるくらいがある。他方、我が国においてアウグステイヌスの研究書は多種存在するが、『神の国』を単独で扱ったものは柴田平三郎の政治思想研究とジルソンの翻訳が目につく程度で、特に我が国の研究者が宗教思想を正面から扱ったものは存在しないような状況である。

この書物の読書は、あたかもうつそうとした昼なお暗いいて、とくに読書に不可欠な部分の基礎知識を伝える。第二部では、『神の国』の叙述の基盤となる「時間」と「空間」の思想、つまり「歴史」と『神の国』の「国」にあたる「キウイタス」の思想について解説し、そこからこの書において中核的な重要性をもつ「国家の秩序」や「愛の秩序」の解説へと展開する。この第二部により、読者は『神の国』の思想的要点を最初に把握することができる。

以上、本書は構成と基本的思想において『神の国』の全体像を示す貴重な書であり、今後我が国でこの読書を試みる者にとっての不可欠の参考書であろう。なお、巻頭に記されている、一学徒としての若き日の著者と『神の国』との出会いについての回想も、短い文章ながら心に残るものであったことを付記しておきたい。

本書はこのような大きな欠落を埋める画期的なものである。著者にはすでにアウグステイヌスについての研究書が数冊あり、その蓄積は本書においても生かされている。第一部では、時代背景を簡単に解説した後、『神の国』の内容を各巻ごとに詳細に要約・解説しており、読書の手引きとして大変有益である。さらにローマの社会や宗教につ

（わた・みつじ＝聖学院大学教授）
（A5判・三一〇頁・本体四二〇〇円＋税・教文館）

キリストの救いとは何かを、 大胆に問い直す

〈評者〉藤本 満



人生のすべての物語を新しく

シエルターの神学から傘の神学へ
演 和弘著

著者は、評者と同じく悔い改め・福音的回心・救いを強調するホーリネス系の福音派の教会に仕え、その神学的傾向に問題意識を抱えつつ、神学の学びを東京聖書学院、ルーテル学院の公開講座、立教大学キリスト教研究科修士、アジア神学大学院の牧会学博士（エラスムス研究）へと広げていった。著者が持っている博識、そして神学的な課題を深める論法が、本書に結実している。

副題の「シエルターの神学から傘の神学へ」は、本書の最後に説明されているが、本書の意義を伝えるために、はじめに把握しておくことも益であろう。著者によれば、一般的に救いは次のように理解されてきたという。神に背を向けた世の支配に神の裁きは天から下される。罪に対する神の裁きを逃れるために、この世界にシエルター（教会）が用意されていて、その入り口は、小羊の血が鴨居に塗ら

れている。その入り口に牧師は立ち、それをくぐる者は、罪を悔い改め、私たちの罪の身代わりとして十字架の死を遂げたキリストの十字架に依り頼む。

しかし、教会、すなわちキリストの許に来る人は、必ずしもそのような罪意識に打たれた人ではない、というのが本書のストレートな問題意識である。そこで著者は、救いを贖罪に限定して論じてきた西方教会の流れに対し、あるいは悔い改めと罪の赦しに集中しすぎるプロテスタントの救いの理解に、様々な問題提起と考え方の転換を提示している。

罪と称している事態の中には、災害被害のような不条理な苦悩と苦しみも含まれている。病もあれば、悲しみや人としての限界や弱さもある。個人的な罪もあれば、社会構造が作り出す悪もある。私たちはこうした窮状から、救いを求めてキリストの許に来て、キリストの救いに守られ、

育てられて生きていく。その時、シエルター的な考え方は通用しない。少し長くなるが、本書の肝となる文章を引用しておく。「傘を用いるのは雨の時である。しかも家の外、つまり屋外である。そして傘には特定の入り口はない。いずれの方向からでも傘の中に入ってくるができる。そして、どこから入ろうと傘の下に身を起きながら帰るべき家へと向かって歩く。その途中、傘はいつも濡れないように、道行く人に伴ってくれる。そして、目的地に着くのである。まさにそのイメージがイエス・キリストがもたらす救いと重なり合う」（二〇一頁）。このとき、著者は長血を患ってイエスの助けを求めて傘の中に飛び込んでくる女性の物語を深く分析しながら説明している。

なるほど、「傘のイメージ」とは、そういうことかと最後にわかってわかる。著者は、シエルターから傘のイメージへの展開を促すために、西方教会の救いの考え方と東方教会のそれを比較し、刑罰代償説に中心を置いた贖罪論を再検討し、キリストへの信仰なのかキリストの真実（従順）なのかという「ピステイス・クリストウ論争」を検証し、ウエスレー的な聖化論の重要性を説き、予定論ではなくすべての人に提供されている神の愛を説明し、救いが十字架だけでなく、受肉・復活・昇天・洗礼・聖餐・交わりなどのよ

うに関わるのかと、さまざまな神学的問題を考察している。

個別の論議も興味深いが、本書の全体を貫く「救い」という人生のすべての側面を包み込む物語を忘れてはならない。キリスト者と言えども、「世」に生きる時、「世」に影響され、「世」に倣っている。その生き方の根本には自己追求があり、自分の欲求を充足した高慢を身につけてしまっている。救いは、そのような罪深さが赦されるだけでなく、そのような構造から私たちを救い出し、神の国の原理と価値感をイエスに倣い、この世にあってキリストの原理に「凜として立っている」（二〇八頁）教会にあって、世の構造に挑戦し続けていくという、存在と生き方の大変革がキリストにあって可能とされている。したがって、本書の題名は「人生のすべての物語を新しく」である。本書はいたるところで、聖書の物語と私たちの人生を重ねてくる。私たちが意識せずに、この世の「構造」に規定されてしまっていることが明らかにされ、御言葉に学び、キリストに倣って生きることを教えられる。神の像に創造された人間が、キリストの像に造りかえられ、創造の本来的な姿を完成していくという壮大な物語が本書を貫いている。

（ふじもと・みつる）
（四六判・二三三頁・本体三三〇〇円＋税・教文館）

キリストが欲せられる 生き方を示す

〈評者〉金子晴勇



森明著作集「第二版」 基督教共助会編

本書の出版は森明の創始となる「基督教共助会」がその創立一〇〇年を記念して企画された。わたしは半世紀前その初版を読んだが、本書には改訂と解説が施されており、読みやすくなった。全体の構成は「小伝」「説教および感想篇」「講演篇」「論文篇」「著書篇」「創作篇」の六部に分けられ、終わりに「資料」「年譜」「解題」などが付けられた。

森明は明治の文相森有礼の子であり、名高い思想家森有正の父である。しかも三八歳でもって短い生涯を終わったキリスト教の牧師にして優れた神学者であった。そこで、いくつかの代表的な作品を紹介しながら、その神学思想で注目すべき点を指摘してみたい。

先ず巻頭に置かれた「涛声に和して」というエッセイが重要である。そこには湘南の地へ保養に赴き、涛声に和して未完のままになった課題に思いを馳せた。第一は「排日

問題」が高まったアメリカ帝国主義に対する懸念であり、第二は「文化意識による真理の客観性とキリスト教信仰との交渉」つまり、キリスト教と文化という生涯にわたる課題である。第三は「キリストを仰ぎ求める」視点から構想された贖罪論の問題である。

第一の問題は短文「民族の使命について」その他で彼の基本姿勢が明瞭に示される。それは歴史を通して実現される日本民族の使命であり、アメリカの哲学者ロイスの『忠義の哲学』などに示唆されて、神と人との関係が武士道の君臣関係に求められ、このような弟子の特性によってキリスト教に対する日本的な貢献がなされうると説かれた。

第二の問題はキリスト教と文化との関連という全著作を通して強調される問題である。それはとくに「文化の常識より見たるキリスト教の真理性」で詳しく論じられる。こ

の文化の概念はキリスト教と一般の日本人を媒介する重要な絆、もしくはロゴス（言論）である。この「人間としての生き方」という文化の検討を当時流行したカント主義者オイケンなどを手がかりにして試み、「常識」という一般的な見地からキリスト教を弁証しようと試みた。このことは宗教哲学にまで発展し、『宗教に関する科学および哲学』という著作に結実する。ここでは新カント派の哲学、とりわけリッケルト『文化科学と自然科学』が繰り返し引用され、カントの構成説から知識が組み立てられる。

第三の問題は「キリスト論」と「贖罪論」を新たに確立する課題である。キリスト論は「キリストの人格および位置」という論文で詳論され、同じ書名で知られるフォーサイス神学の見地が導入される。この神学の鍵語「アトーン

メント」は「代わって罰せられる」と訳され、ここから贖罪論が説き明かされる。この点は未完成で終わったが、著作の最後を飾る戯曲「靈魂の曲」を参照すると、その特質が浮かび上がってくる。ここでは鋭敏な良心が死の前での絶望から出発し、キリストに「寄りすがる信仰」によって救われる。このようなキリストと魂との関係はパウロでは父子の関係から論ぜられ、中世の神秘主義者クレルヴオーのベルナルドでは花婿と花嫁の親密な関係から説かれ、それがルターの義認論の根底に据えられた。内村も救いを仰ぎ見る信仰に置いた。だが森はさらに一步深めて「そのようにキリストが欲せられる」という洞察にまで到達した。

（かねこ・はるお）岡山大学、聖学院大学総合研究所名誉教授
（四六判・五三三頁・本体一五〇〇円＋税・ヨベル）

ヨベルの新刊案内

佐藤全弘〔著〕

好評発売中!



46判・372頁
2,500円
ISBN978-4-907486-98-3



46判・444頁
2,500円
ISBN978-4-907486-99-0

わが心の愛するもの

— 藤井武記念講演集Ⅰ —

聖名のゆえに軛負う私

— 藤井武記念講演集Ⅱ —

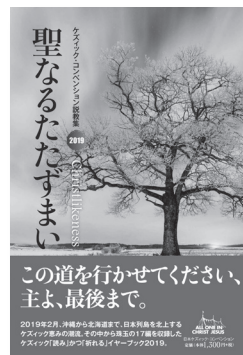
まっただきを求め、自然を愛し、寂しさにむせび泣く。
熱き血潮に横溢する、藤井武を現代に!

無教会の内村鑑三の高弟にして、激動の時代を預言者の如く
駆け抜けた藤井武。42年の生涯に限りない愛惜と敬慕を込め、
その実像を今に伝える働きをライフワークとしてきた著者・
佐藤全弘の講演集全2巻!

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税別)

信仰者のたたずまいを示される

〈評者〉大嶋重徳



ケズイック・コンベンション説教集2019
 聖なるたたずまい
 大井 満責任編集

青年時代に信仰の養われた集会有り。自分はいつからこういう信仰のものの見方を培ったのだろうかと思返ると、「ああ。あそこで語られたことだったなあ」と思い起こすのです。ケズイック・コンベンションは、まさにそのような機会をもたらしてくれ、私が学生時代に聖書講解という喜びを味わった集会です。聖書が聖書として語られて、聖書の魅力にとりつかれたのも、信仰に生きることがこんなにも生き生きとした喜びであり、誇らしいことなのだと知ったのもケズイック・コンベンションなのです。

本書「聖なるたたずまい」に、数多くの説教が掲載されているジョン・ラム師は、私が奉仕をしてきたキリスト者学生会の加盟するIFES（国際福音主義学生連盟）と、イギリスのKGGKであるUCCFで奉仕をした学生伝道の先輩です。実はKGGKが二〇〇八年に東京で東アジア

アの国際大会（East Asia Regional Conference）を準備した時に、メイン講師に招かれたのがジョン・ラム師でした。しかし日程があわずに断念せざるを得なかった残念な思い出と、メールのやり取りを非常に誠実にしてくださったあたたかいその人格を思い出します。

ジョン・ラム師は、福音主義信仰者を集めたローザンヌ会議をリードしたジョン・ストット師が晩年、私財を投じて始めたLangham説教セミナーの後継者です。ジョン・ストット師は人生の最後をかけて、若者たちに聖書を聖書として語られ、「届く」言葉で聖書が聞かれていくことに情熱を燃やしました。そのために必要なのは次世代の説教者の育成でした。その育成のモデルとして後継者となったのがジョン・ラム師です。まさにジョン・ラム師の説教は奇をてらうことなく、誠実に聖書が語られ

ていくイギリスの伝統にあります。奇をてらわずとも、若者に届く説教を見せてくれるのです。それは奇をてらった教会が生まれることへの警戒でもあります。現在、Langhamセミナーの主催者として世界各地の若い説教者育成にも力を注ぐジョン・ラム師の説教を間近に聞くことの出来るのは、若い牧師たちにとっても非常に有益で貴重な機会でしょう。

また何よりこの本の素晴らしいのは日本人説教者が決して海外の著名な説教者にひけをとるどころか、超一流の聖書講解を見せてくださっていることです。日本語の説教シーンを牽引されてきた日本人説教者の説教から学ぶことが出来るのも、本書の大きな恵みの一つです。ぜひ珠玉の説教の一つ一つを手にとって読んで欲しいと思います。ま

た説教の機会のある人は、たとえば教会学校の先生も声に出して語ってみることもこの本の恵みを受け取る経験となるでしょう。

今回の「聖なるたたずまい」という本書のタイトルは、まさにケズイック・コンベンションがもたらしてきた「いかにキリスト者として生きるのか」と、信仰者のたたずまいを学ばせて頂ける貴重な本となっています。

（おしま・しげのり）鳩ヶ谷福音自由教会牧師
 （四六判・一七六頁・本体一三〇〇円＋税・ヨベル）

新刊

一神教世界の中のユダヤ教

市川裕先生献呈論文集

勝又悦子・柴田大輔・志田雅宏・高井啓介 編

〔市川裕先生献呈論文集〕

一神教世界の中のユダヤ教

勝又悦子 柴田大輔 編
 志田雅宏 高井啓介

●A5判上製 本体5,000円＋税

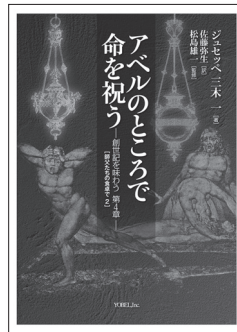
古代メソポタミアの一神教 柴田大輔 / メソポタミアのマクルー儀礼における火と水の力 細田あや子 / 「アバル・ナハラ州の総督」とアル・ヤブドゥ共同体 高井啓介 / 魅力ある女は、名誉を掴む 自分自身に報いる者だ、友愛に富む男は 加藤久美子 / 第二神殿時代におけるガリラヤのリーダーたち 上村静 / 「民」と「自由」と「偶像崇拜」 勝又悦子 / ハイム・イブ・ムーサ『盾と槍』 志田雅宏 / 近代的ユダヤ人ステレオタイプの形成 李美奈 / ほか7篇を収録。 ISBN978-4-86376-078-3

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
 ☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

逃げるカインの建てた街で

〔評者〕川上直哉



アベルのところで命を祝う
創世記を味わう第4章「師父たちの食卓」
ジュセツ・ペ三木一著
佐藤弥生訳、松島雄一監修

一ページ、一ページ、立ち止まり、考える。そんな読書をしました。ふと、ずいぶん昔のことを思い出しました。まだ聖書を知らず、ただ「聖書は神の言葉」とだけ信じて、手元にある聖書の一字一文字の意味を必死に手繰っていた、もう懐かしい昔を思い出しました。本書は、そうした読書を読者に求めるものでした。

本書は、キリスト教の伝統の全て、つまり、ユダヤ教の「旧約」聖書解釈と、東西ローマの系譜に連なる教会の聖書解釈と、そのすべての伝統に聴き、聖書を読もうとするシリーズの第二巻です。ラビも、古代教父も、中世西欧の神学者も、東方正教会の司祭も、そしてプロテスタントの代表的神学者たちも、それぞれの文脈から、同じ物語について語りだす。そこに聴き、その交響の中で「今・ここ」の文脈に聞こえるはずの御声を聞き取る。(ただ、五二頁

辺りには、フェミニズム神学に聴くことが不足している、とも思われますが)。膨大な資料に加えて、自分の中に残る記憶をたどりながら「学問的ではなく、あくまでも祈りながら読む信者として考えたい」と著者は言うのです。本書はそうした努力の結晶となっています。それは、黙想というものの、この上ないモデルとなっていました。

このシリーズで著者が展開する黙想は、近代以降整備された科学としての「神学」(典型的には聖書学)とは異なっています。「神学は神のみを語り、その神は『対象』にされると常に姿を消します。神は『対象』になり得ず、『主体』でしかあり得ません。神学の主体は神であり、神学には対象はなく、主体しかないのです。神を語る学問は神の言葉で語る以外に語りようがありません。神学とは、聴くこと、従うこと、眺めることです。」という言葉に、たとえばそ

れは、凝縮されていました。神学論文と説教の違いは、まさにここにある。教会で求められているもの、現場で求められている言葉は、まさにこの意味での「神学」である。科学的・学問的な「神学」は、この意味での「神学」のための道具に過ぎないのだから——そんなことを思いました。本書が取り上げるのは創世記にある「カインとアベルの物語」です。キリスト教全体の伝統に徴する時、この物語もまた、主イエス・キリストの十字架物語に直結したものとなることを、改めて知らされます。たとえば「アベル」を「息」あるいは「自分の根源である非存在(無)」として捉え、この「自分の無」によって「人は自分を知り、神を知るようになります」と展開することが繰り返されます。そうしてこの物語は、私たちの世界の個別具体的な現場に

偏在する「十字架」を照射するものとなるのです。そして、本書は著者が生きる「今・ここ」へと黙想を広げます。具体的には「やまゆり園」の事件です。あのような巨大で不条理な出来事に霊的に切り込むこと。それを著者は本書でやり遂げているのです。説教はすべからず、そうあるべきだし、そうできるのだと、励まされます。今、この原稿は、所謂「新型コロナウイルス」に私たちの社会が右往左往する中で書いています。今、本書の最後に描かれる「カインの建てた町」こそ、私たちの社会だ、と思わされます。そして、その町を救う手がかりまで、本書は示しているのです。今まさに、この書は読まれるべきものと思われてなりません。

(かわかみ・なおや || 日本基督教団石巻栄光教会牧師)
(A5判・一九二頁・本体一五〇〇円+税・ヨベル)

教会の再生は説教の再生から!



説教黙想アレテイア 特別増刊号 伝道する説教をしよう イエス・キリストを紹介したい!

牧師・信徒の
実用的必読書

教会外の方に福音を伝える説教であり、教会員に伝道への情熱を与える説教である伝道説教をどう語るか。旧約聖書から25箇所を精選して解説。
B5判・128頁・2200円

子どもと関わるすべての方へ



神さまが見守る子どもの成長 誕生・こころ・病・いのち

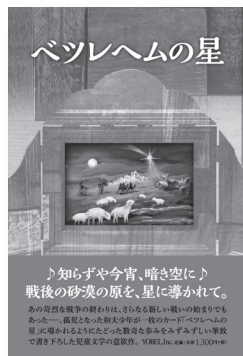
石丸昌彦

神さまの愛のまなざしを注がれて、ゆつくりと大きく成長する子どもの魂。その豊かさを存分に味わう、クリスチャンで精神科医の著者による新しい子育ての道しるべ。
四六判並製・160頁・1760円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyoku@bp.ucci.or.jp (価格10%税込)
<http://bp-ucci.jp>

混乱する社会の中で、親の信仰 は子どもに引き継がれるか？

〈評者〉 中村和雄



ベツレヘムの星
原 野百合著

太平洋戦争に巻き込まれて、両親を失って妹と残された櫻村和夫が、多くの方々を支えられて、最後は教会へ導かれる物語で、著者の処女作品とのことである。舞台は阿武隈山地と太平洋との間に広がる太平洋市。戦争末期の一九四五年からの足かけ四年の間に和夫が経験したさまざまな孤児の生活と、それを支え、導いて下さった神さまの物語である。

軍需工場を中心に栄えてきたこの町は、戦争末期の三回にわたる空爆と艦砲射撃によって、破壊つくされた。戦場に出征した父は戦死したとの通知が届き、子どもたちを育ててきた母は艦砲射撃の犠牲となった。両親も住む家も失った二人の子どもは、敗戦を迎えた焼け野原に放り出されたのである。

和夫の妹の鈴子と同世代である私には、「戦争孤児」、「やいためやせ衰えたからだは、ふとした怪我が元で敗血症にかり、短い生涯を終えた。葬式は産科医の藤崎夫妻が中心になって行われ、牧師の持つて来た花に囲まれた鈴子は、両親が待っている「かがやきのみにく」へ旅立って行った。やがて、森田は友人を頼って東京へ出かけて行き、和夫は藤崎夫妻の家に住んで、本屋で働くようになった。この家では、朝、ご夫妻と和夫が食卓に着くと、短く聖書を読み、感謝の祈りをしてから食事を取るようになっていた。それに、書棚にあった聖書も神さまについて少しずつ教えてくれた。そうした和夫の心に、「盗んではならない。」ということばが重くのしかかってきた。自分が今まで行って来たことは、空腹を癒すために他人の畑から野菜や果物を掠めることだった。それは、生きるために仕方がないことだったと言い訳しても、神さまのことばから逃れることはできなかった。

容赦なく破壊し、殺しつくす戦争。それは、人間の傲慢と自己中心の結果なのではないか。それに比べて、平和に

ミ市、「買い出し」などのことばが醸し出す当時の緊張した雰囲気を感じさせてくれた。そうした二人が海岸で出会った森田五郎は、南方の戦場から戻った男だったが、自分の手で建てたバラック小屋に二人を住ませ、和夫には製塩の仕事を手伝わせた。

二人の兄妹が爆撃の中でも、孤児になってからも肌身離さず大切にしていたカードがあった。それは、和夫の記憶によると、何年も前の十二月に、両親と一緒に出席した庄屋のような大きな家での集まりで、一人の学生が渡してくれた手作りのカードだった。それには、砂漠のようなところをラクダに乗った三人の人が描かれており、空には大きな星が光っている。誰かがそれは、「ベツレヘムの星」と教えてくれた。

精一杯生きてきた鈴子であったが、十分な栄養が取れな満ちた藤崎家。この家に来て分かったことは、藤崎夫妻も自分の両親もクリスチャンで、同じ教会に通っていたこと。それから、あのカードをもらった集会はクリスマス会で、あのカードは、若くして亡くなったご夫妻の息子さんが描いたものだということ。

その年のクリスマス。町の高台に新築された教会に向かった和夫は、暗やみに輝く大きな星を見つけた。そのとき、和夫の心に「光は闇の中に輝いている。」ということばが浮かんで来た。その光は自分を静かに、確実に導いてくれていたイエス様なのだ。教会のドアを開けると、牧師が満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。

この物語は、戦争の混乱を通して、両親から子どもへと信仰が引き継がれて行ったことを示している。今度は、和夫から次の世代に信仰が引き継がれて行くのである。私は、成人した和夫の生き方と働きを、ぜひとも見たくな

た。
(なかむら・かずお 訳家「児童文学」)
(四六判・一八八頁・本体一三〇〇円＋税・ヨベル)

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_syoten_0530@afoc.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fqwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新中延町2-2 榎ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.jp/~yohara.cds/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshala.coocan.jp/	nagoya-seibunshra@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東1ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www.w6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mex.htm	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環区西原字翁振777 沖縄キリスト教団	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

四六判・232頁・本体2000円

現代社会が抱える「環境」や「いのち」といった課題に対して、キリスト教はどのようなメッセージを発信できるのか。これまでキリスト教が歩んできた歴史を振り返りつつ、神学、キリスト教史、宣教学、環境・社会学等の分野から立体的に考察する。

高山貞美／原 敬子編著

——日本カトリック神学の過去・現在・未来

正義と平和の口づけ

上智大学神学部創設60周年記念講演会講演集

A5判・506頁・本体6000円

ヨハネ福音書のキリスト論を受け継ぎ展開する、「ヨハネ共同体」に回覧されたヨハネ書簡。論敵との分離が共同体に与えた傷、その癒しと新たな一致の再構築を奨励する手紙を、日本におけるヨハネ書簡の第一人者が綿密に解説。ヨハネ書簡理解に有益な背景・知識も多数提供。

三浦 望著

第1、第2、第3ヨハネ書簡

NTJ 新約聖書注解

■日本キリスト教団出版局

現代のバベルの塔

——反オリンピック・反万博

新教出版社編集部編

2020東京オリンピック・パラリンピック、2025大阪万博は、民の生活を破壊する「現代のバベルの塔」だ！解放の神学、科学史、ジェンダー研究などから9名の気鋭の論者が参加し、その支配からの脱出を望み見る決定的論集。うち3名の鼎談も収録。

四六判・176頁・本体予価1800円

INFORMATION

近刊情報

福音と世界

2020年5月号

特集 環境といのち——私たちの現在地

寄稿者＝藤原辰史、太田和彦、奥野克巳
和田喜彦、藤原佐和子、小倉沙央里

好評連載 I Say a Little Prayer 開かれる世界
(栗田隆子)、「いまを生きるみことば」(金迅野)、
くまさんのシネマめぐり(好井裕明)、パビロ
ンの路上 Conjectures of a Son of a Preacher
Man (マニエル・ヤン)、教父学入門(土井
健司)、新約釈義第二モチ書(正学)ほか

A5判・本体600円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。
新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

コロナウイルスによる混乱の中
で、この文章を書いています。今、
改めて迫ってくるのは、イザヤ書
40章8節です。「草は枯れ、花はし
ぼむが、わたしたちの神の言葉は
とこしえに立つ」。

最近「新大学生に勧めたい10冊」という題でいろいろな
方が、インターネット上にリストを掲載していますね。そ
のことも、この状況に関係しているのかも。世が揺れ動く
ときにも「とこしえに立つ」言葉が存在する！

私だったら、新大学生にどういう本を勧めたいだろう。
迷いに迷って3冊挙げるなら……、熊野純彦『レヴィナス
移ろいゆくものへの視線』、安積純子・立岩真也他『生の
技法 家と施設を出て暮らす障害者の社会学』、宮本久雄

予告

本のひろば
2020年6月号

本・批評と紹介

野村 信、吉田 新編『苦難と救済』、富坂キリ
スト教センター編『奪われる子どもたち』、高橋
由典著『続・社会学者、聖書を読む』、袴田康裕
著『教会の一致と聖さ』、宮本久雄、石井智恵美
編『押田成人著作選1』、佐藤全弘著『わが心の
愛するもの』、日本キリスト教団出版局編『ア
レティア特別増刊号―伝道する説教をしよう』、
D・T・スチュワート他著『ヨシヤの改革』他

『聖書と愛智 ケノーシス(無化)をめぐる』。ばらばら
なようですが、いずれも愛と自由を伝えてくれた本です。
今日の私の土台を築いてくれました。比較的最近の本なら、
ある編集者の読書日記『八本脚の蝶』をお勧めしたいな。
哀切ですが不思議に力をいただきました。

では教会の方ならどうだろう。例えば最近教会に來始め
た方に、「この本いいですよ」とお勧めするには。

自分が編集に関わっていない本をあげるなら……、加藤
常昭『ハイデルベルク信仰問答講話』上下、ヘンリ・ナウ
エン『愛されている者の生活 世俗社会に生きる友のため
に』、奥村一郎『祈り』。「名著」の定義が再読に耐えうる
ものならば、私にとってまさに「名著中の名著」。私の中
に立ち続けている言葉です。そういう言葉を世に送るため
に、私も働きたいです。(土肥)

詩篇の思想と信仰 V

第101篇から
第125篇まで

月本昭男 著

17年の歳月をかけ、全6巻ついに完結！

3月10日

厳密な試訳、詳細な語釈、各詩の構造と成り立ちの分析、そして思想と信仰について、行き届いた解説を施す。古代オリエント学に通暁する著者にして初めて可能となった周辺世界への広い目配りも併せ、ヤハウエ信仰の詩文学の本質に迫る。◆四六判・本体3900円

誰にも言わないと言ったけれど

ジェイムズ・H・コーン 著 / 榎本空 訳

黒人神学と私

3月25日

黒人神学の先駆者として、現代神学史に後退不可能な一歩を刻み込んだ著者の最後の著作、自らの神学形成の道程を率直に綴った自伝の邦訳ついに刊行。◆四六判・本体3000円

正義と法

キリスト教法倫理の基本線

3月25日

ヴォルフガング・フーバー 著 / 宮田光雄 監修 / 佐藤司郎、木部尚志、小嶋大造 訳

われわれの全生活に影響を及ぼす法。正しい法とは何か、法と倫理、正義と法はどう関係するのか。法の神学的基礎を探り、人権を最重要価値として複雑な現代世界における法治国家のあるべき姿を論じた大著。著者はキリスト教社会倫理の泰斗、ドイツ福音主義教会監督、またWCCの指導的神学者として活躍した。待望の邦訳。◆A5判・本体9500円

現代神学の冒険

新しい海図を求めて

大反響

芦名定道 著

神学とは何か、どこに向かうのか？ 鮮やかな見取り図！

驚くべき該博な知識と鋭利な分析力によって、現代神学の思想的課題を明らかにし、進むべき方向性を展望する。キリスト教の現在と未来を考えるために必携の海図がここにあり！『福音と世界』好評連載の単行本化。◆A5判・本体3400円

ヤバいぜ！ 聖書

あなたに贈る40のメッセージ

明治学院テキスト作成委員会 編

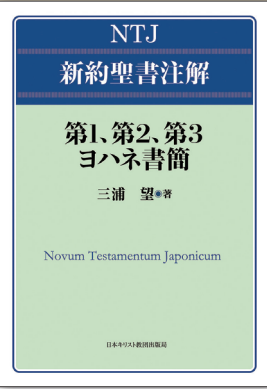
中学生から大学生までを対象に、旧約聖書と新約聖書から20ずつ

テキストをとりあげ、現代の問題と関連させて解説、私たちの生き方を考える。関連するコミックや映画も多数紹介。聖書の言葉は突き刺さる！ ◆B5判・本体1000円



斬新な
聖書入門

説教準備に必携！ 日本語で書き下ろす聖書注解シリーズ最新刊



NTJ 新約聖書注解 三浦 望 第1、第2、第3 ヨハネ書簡

論敵との分離がヨハネ共同体に与えた傷、その癒しと一致の再構築を奨励する手紙を、日本におけるヨハネ書簡の第一人者が解説。ヨハネ書簡理解に有益な知識も提供。

2020年4月24日刊行予定

◆A5判 上製・506頁・6,600円

シリーズ
好評発売中

『ガラテヤ書簡』 浅野淳博 6,600円

『ルカ福音書 1章～9章50節』 嶺重 淑 5,720円

上智大学神学部創設60周年記念講演会講演集

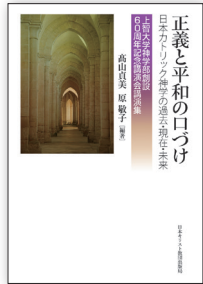
正義と平和の口づけ

日本カトリック神学の過去・現在・未来

高山貞美／原 敬子 編著

2020年4月23日刊行予定

現代社会が抱える「環境」や「いのち」に関する課題を、これまでの歴史を振り返りつつ、神学、キリスト教史、宣教学、環境・社会学等の分野から立体的に考察する。 ◆四六判 並製・232頁・2,200円



2020年4月から9月まで

NHK「こころの時代」で「コヘレトの言葉」を紹介！

講師はコヘレト書研究の第一人者・小友 聡氏！

放送局
NHK Eテレ

番組名

「それでも生きる
旧約聖書「コヘレトの言葉」

放送時間

第3日曜日 午前5時～6時 (再放送 同週土曜日 午後1時～2時)
毎月1回放送／全6回シリーズ

講師：小友 聡
東京神学大学教授
日本基督教団
中村町教会牧師



小友氏の著書、『VTJ 旧約聖書注解 コヘレト書』(3,520円)、『コヘレトの言葉を讀もう「生きよ」と呼びかける書』(1,540円) もあわせてお読みください。黙示思想との関連性に着目し、斬新な読み方を示しています。



本
の
ひ
ろ
ば
一九五七年七月一日発行 第三種郵便物認可
二〇二〇年五月一日発行 毎月一回一日発行
第七四九号 二〇二〇年五月号

発行所 〒163-0814 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三-三三六-〇一七〇 振替〇〇一七〇-五一一六七九
発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 佛平河工業社
日本キリスト教出版株式会社 電話〇三-三三六-〇一五六七〇

定価七八円(税抜七一円) ㊦63円
一年分一三〇〇円(送料共)